

## 本学創立十周年記念号に寄せる言葉

本学は創立以来、人文、理学及び家政学、農学の三部門にわけて、學術報告を毎年ひき続いて発刊してきた。今年は本学の創立十周年にあたるので、諸種の記念事業の一つとして學術報告記念号の刊行を企てた。そのうち人文部門の研究成果の一部を集録して記念号としたものが本号である。

學術の研究は大学に課してある使命の一つであつて、その成果の公表は大学がはたさねばならぬ責務の一つである。この責務を、はたさねばならぬという考えかたからだけではなく、本学人は本学設立の目的と主意にかんがみて、一面においては、清純で教養ゆたかな男女人材の育成にむかつて力をそそいでいると同時に、他の一面においては、各自の専門分野における學術の研究にむかつて励みを続けている。

その成果として、我が国および欧米の諸学会誌にのせて學術の進歩に寄与した多数の研究報文のほかに、力作としての著書の数も少なくない。そのうちには海外にて高い評価を受けているものもある。これとは別に、本学発刊の學術報告に登載した論著・報文のみでも、人文部門にありては九七篇（内・欧文五篇）、理学及び家政学部門にありては一五七篇（内・欧文二八篇）、農学部門にありては一九二篇（内・欧文三八篇）に達している。

これらはいずれも本学人の精進・努力の積みかさねである。研究への施設は貧弱であり、研究への諸経費は窮乏していたにもかかわらず、よくもこれだけの成果をあげ得たことであると思う。これは全く旺盛な研究意欲のあらわれであり、また、よき伝統を本学に樹立しようと志す愛学心のあらわれにほかならないであろう。それにつけても、施設と諸経費が、せめて University level に近づいているなら、本学の業績はもっとあがり、学的光彩は本学の学風をすでに特徴づけていたであろう。

ことを思えば、ただ嘆息が残るだけである。

さりながら「天国は一粒の芥種のごとし、人これをとりにて、その畑に播くときは、万の種よりも小けれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、その枝に宿るほどなり」という聖節がある。この言葉はわれらを励まし、また、われらに希望をあたえる。心して拓いて培えば荒野も沃地となるのである。心を協せて忍耐がよく、誠実・精励をつくすならば、きつと美しい教育の花が咲き、ゆたかな研究のみのりを、収穫し得るといふ希望の実現を共々に慶びあい得る時機が到来するであろう。みんなで、その機を待とう。希望と楽しみをもち続けて。

本号は諸事貧しいうちに築きあげた業績集である。築きあげるまでの辛勞には、なみなみならぬものが多々あつたであろうと思う。それだけに著者のめいめいにとっては、本号の発刊をみて一層の感懐が湧き出ることであろう。そして感懐の流れの上には研究心と愛学心を満載した舟が、静かに帆をあげることを希っている。

希うことはほかにもある。まず京都府当局に対する感謝の発心を本大学人に希うのである。また本号所載の業績を多くの学界人がわかつてくれれば、著者のめいめいは本望であり、且つ嬉しく思うことであろう。本学としても全く同じである。

だが、学界人が本号の業績をわかつてくれなくとも、気にしないでいるだけの心境に到達することを希うのである。これはなかなかのことである。だが、本大学人のみんなが、こういう心境になり得れば、本学は極めて明るくなるであろう。

昭和三四年一月二八日

京都府立大学長 近藤金助